

震災で犠牲の消防関係者281人

11年消防白書

総務省消防庁は16日、2011年版の消防白書を公表した。東日本大震災で亡くなったたり行方不明になったりした消防職員は岩手・宮城・福島3県で27人、消防団員は254人に上る。

消防団員は他に仕事を持ちながら地域防災を担っている。犠牲になった団員の多くは、避難誘導や水門の閉鎖などに取り組む中で、津波に襲われたとみられるという。消防本部など拠点の被害も大きく、3県で全壊16カ所、半壊11カ所、一部損壊が122カ所。ポンプ車や救急車など75台が使用不能になった。消防団の詰め所なども412カ所が使えなくなった。そんな状

況下で、震災から3カ月間の避難所などへの救急出動件数は、3県で4500件超に上った。震災を踏まえた課題として、消防団員の装備や訓練の充実、水門閉鎖の自動化などを挙げた。また、消防職員、団員の被災ストレス対策として、精神科医などを現地に派遣して心のケアにあたる必要性も指摘した。

団員「なり手いなくなる」

岩手県大槌町では、東日本大震災で死亡・不明となった消防団員は16人を数えた。消防団は地震発生から17分で、町内55カ所の水門を閉め終えたが、その後の住民の避難誘導や救助活動中に津波に襲われた。

も「お前も人のためになれ」と浜田さんに勧められたからだという。

門の近くで住民の避難誘導をしていて逃げ遅れた、と後に同僚から聞いた。水門のすぐ内側からは、海の様子がまったく見えない。浜田さんの遺体が見つかったのは、5月のことだった。

団員の一人で建設会社社長の天満昭広さん(51)は、団員で親友だった漁協職員、浜田雅史さん(当時50)を失った。2人は幼なじみで、消防団に入ったの

地発生直後、2人は他の団員らと手分けして、大小5カ所の水門を閉めた。天満さんはいったん高台の家に戻ったが、浜田さんの安否が気になり、何度も携帯電話に連絡した。だが連絡がとれないまま、別の場所

天満さんは語る。「危険を察知できるように、団員同士連絡が取れるような小型無線機を各自持てるようにしてほしい。このままでは団員のなり手がいない」

得なくなつた。浜田さんは、水

避難誘導や救助活動をせざるを得なくなつた。浜田さんは、水

い」

(東野真和)